

12 年ぶり “黒潮大蛇行”

日本の南岸に沿って流れている黒潮が、8月20日頃から紀伊半島沖で、蛇行していることが、気象庁の解析でわかりました。この先1ヶ月程度続けば、12年ぶりの「大蛇行」となる見込みで、気象庁は「東海や関東の沿岸で高潮が発生しやすくなるほか、気象や漁業・海運業にも悪影響が出る恐れがある」として注意を呼び掛けています。



「水温の上昇」？

12年前の大蛇行と同じような流路をたどった場合、伊豆諸島の西の御前崎から三重県沖の熊野灘辺りまで暖かい水が流れ込み、沿岸の水温が例年より2度から3度ほど上がる可能性があります。

「冷水塊(れいすいかい)」の出現？

蛇行の原因は、はっきりとはわかっていませんが、黒潮が蛇行するときは必ず紀伊半島沖あるいは遠州灘沖に冷水塊が出現します。[⇒冷水塊とは、海洋中に存在する周囲より5~10度低温の海水の塊] このため、沿岸・沖合漁業に大きな影響を与え、カツオやマグロの漁場はるか沖合に移動します。また、2004年の大蛇行では、静岡県県のシラスの漁獲量が三分の一まで落ち込み、磯焼けが発生しアワビ漁など沿岸漁業にも大きな影響が生まれました。

「高潮の発生」に注意？

大蛇行が起きると、蛇行の北側の陸に近い沖合に反時計回りの別の海流ができる影響で、東海や関東で、高潮が発生しやすくなり、低い土地では浸水などの被害が起きる恐れがあります。

「魚釣り」に及ぼす影響？

「単純に考えて、黒潮と岸の距離が大きくなるため、黒潮に乗って北上してくる魚の接岸・入湾数が、減るのではないか?」「潮位の差が大きくなるためタナ(=魚の摂餌層)が大きく変化し、タナ取りが難しくなるのではないか?」などと真剣に悩んでおられる釣り人も居られます。